

二〇一七年度

二月一日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1-1 から 1-14 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。①②③は場面を表します。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

① ゆびきり、げんまん、嘘うそついたら針千本——などというけれども、嘘をついた相手に針なんか吞のませたつて、つまらない。第一、子供の身で、針を千本も集めるのは容易なことではないし、その千分の一の一本だつて、吞めば命にかかわるといふことぐらいは知っている。(中略)

それで、なにか約束するときは、お互たがいにせいぜいa 懐ふしを痛めるぐらいで済むように、ゆびきり、げんまん、

「嘘ついたら、板チョコ二枚、もーらう。」

「嘘ついたら、板チョコ二枚、あーげる。」

「きつとよ。忘れないでね。」

「大丈夫。一時に、お宮の鳥居のところね。」

「家の人に話したら駄目よ。」

「わかってるわ。」

「じゃあ、また明日。」

「また明日。」

橋のたもとでひとりになって、郷子は、ゆびきりした小指の付け根が痛かった。相手のヒロミは、おなじ小学二年生だとは思えぬような太い指をしている上に、どういふものか、ゆびきりのとき、相手の指を振むるように締めつける癖くせがある。軽く絡かませ合うだけでも、げんまんはげんまんなのに、ヒロミは念を押おすように相手の指を締めつけないことには気が済まないのだ。

だから、ヒロミとゆびきりするときは、誰だれでも最初から逃にげ腰こしで、板チョコ二枚の約束が済むか済まないうちに急いで手を引つ込こめようとするのだが、ほとんど成功したためしがない。ヒロミの方も心得こころえていて、逃げようとする直前に力を籠こめてくる。なにしろ相手はクラスで一番の力持ちだから、こちらはカンネンbするほかはない。きつとよ、忘れないでねと締めつけられて、じゃあ、また明日でと一振ふりされると、小指が付け根からちぎれそうになる。

晴れた土曜日の昼さがりで、白く乾かわいた川べりの道にガードレールの影かげがくつきりと落ちている。川といても、岸を固めた石垣いしがきのところどころに下水道の太い土管が口をあけているどぶ川だが、晴天に恵めぐまれた土曜日だから洗濯せんたくをする家が多いとみえて、普段は黒くろずんでいる川づらがほとんど洗剤せんざいの白いあぶくに覆おおわれていた。

郷子は、そのあぶくの川を見下ろしながら、この分なら明日もいいお天気だろう、どうやら今夜はてるてる坊主ほうずを作ることもなさそうだと思った。郷子は、宇宙の話が大好きで UFO の実在を信じているが、それ①でもやはり、明日は晴れてくれればいいがと気になる晩には、こっそりてるてる坊主ほうずを拵こしらえて窓の外に吊つるさないではいられない。

案の定、自分の家の物干しにも竿さおいっぱい洗濯物が並んでいるのが、川べりの道から塀へい越しにみえた。郷子は、その洗濯物のなかに、明日着ていこうと思っていた気に入りの紺こんのセーターが混まじっているのを見て、がっかりした。こんなことなら、昨日のうちに、畳たたんで机の引出しにでも隠かくしておくのだったが、今朝家を出るまでは、まさか明日の日曜日にヒロミと二人で誰にも内緒ないしよの遠出をすることになるとは思わなかったのだ。

洗面所で手を洗いながら、郷子は、前の鏡に映っている自分の顔をまじまじとみた。子供が嘘をついても、お父さんやお母さんにはすぐわかるんです。嘘がちゃんと顔に書いてあるから——いつか、どこかで聞いたそんな言葉が、ふっと思い出されたからである。けれども、顔はいつもと変りがなかった。

「明日はママに嘘いって知らない街へいくんだけど。」

心のなかでそう呟いてみたが、顔にはなんの変化も現われなかった。

ママは、庭の池に落ちた白木蓮の落葉を網で掬い上げていた。ママの目がちよつとこわかったが、こわいことは早く済ませた方が後が楽になるから、サンダルを履いて出ていって、

「お手伝いしようか?」

「あら、珍しいこと。でも、いいの、もうすぐお仕舞いだから。」

「あたしの紺のセーター、明日までに乾くかしら。」

「乾くでしょう、このお天気なら。どうして?」

「なんでもないの。ただ、どうかなく思っただけ。」

③実際、なんでもなさそうに軽くスキップをしてみせたが、軀が思うように弾まないの、すぐよし。やはり秘密で膝が重たくなっている。

2

三時のおやつするとき、ママが、

「八重樫先生、結婚なさるんですってね。」

だしぬけにそういうので、郷子は、ぎくりとした拍子に、ただ掻き廻すだけのつもりだったスプーンで思わず紅茶を掬って飲んで、叱られた。

「お行儀が悪くなったわ。誰の真似?」

「べつに真似したんじゃないんだけど……。」

遊びにきたヒロミに紅茶を出すと、給食のスープでも飲むようにいちいちスプーンで掬ってはびちゃびちゃ音をさせるから、ママは猫みたいだといって嫌っている。

先生の結婚話とヒロミのことが並んでママの口から出てきたので、てっきり、明日の遠出が見破られたと思つたら、そうではなかった。

「今朝、クラス委員のお母さんから電話を貰って、びっくりしたのよ、なんにも知らなかったから。どうして話してくれなかったの?」

「だって……嘘だと思つてたんだもん。」

「先生が結婚するってことが?」

「だってね、前に先生、私は一生結婚しないって、そういってたんだから。」

ママは、くすつと笑って、

「前になって、いつのこと?」

「去年。一年生のとき。」

「じゃ、一年も一年半も前のことじゃない。その間に、先生の気持が変つたんだわ、きつと。先生だって、時間が経つと気持も変るし、まわりの事情も変るのよ。」

「じゃ、先生は本当に結婚するの?」

「そうよ。だって、クラスのみんなにも、先生の口からはっきりそうおっしゃったんでしょ?」

それは、つい三日前の水曜日のことで、最後の五時間目の授業が終ったとき、

『ちょっと、みんな、静かにして聴いて頂戴』と八重樫先生がいった。みんなが静かになると、『実はねえ、こんど先生、結婚することになったんです。お嫁にいくの。それで、今週の金曜日から来週の水曜日までお休みをして、木曜日からまた出てきます。先生がお休みしている間は、家庭科の横地先生が代わりをしてくれますから、横地先生のいうことをよく聴いて、事故のないように勉強をつづけていてください。わかった？』

④ みんなは、返事をするのも忘れて、きょとんと先生の赤く上気した顔を眺めていた。

『それからねえ、先生は、来週出てくるときはもう八重樫じゃないの。こんどは小森。こう書きます。』
先生は、黒板に大きな文字で小森と書いて、みんなをちよつと振り返ると、急いで消した。

『ですから、これからは小森先生、小森克子先生です。でもねえ、小森先生になっても、先生の中身はこれまでとちよつとも変わらないの。ただ呼び方が変わっただけ。だから、先生はこれからもずっとみんなと一緒なのは、い、なにか訊きたいことは？』

先生は片方の手のひらをみせて、みんなの顔を見渡した。ヒロミが勢いよく手を挙げた。

『先生の相手は、どんな人？』

⑤ 『相手？』と先生は鳩のように目をまるくして、顎を引いた。『ああ、お婿さんのことね？ 先生のお婿さんはねえ、どんな人かを一言でいうと……ハンサム。』

ようやく短い笑い声が湧いた。

『そんなら本当にきまつてるじゃないの。』とママがいった。「先生が教室で、そんな嘘をいうはずがないじゃない？ それに、今朝の電話だって、お母さんたちで五百円ずつ出し合つてなにかお祝いを上げましょうつていう相談だったのよ。」

「……せつかく、ゆびきりしたのにな。」

と、すこし間を置いてから郷子はいった。

「先生と？」

「そう。一生結婚しないっていったとき。」

「針千本で？」

「板チョコ二枚で。」

「じゃあ、あとで先生にそういつて板チョコ二枚貰ったら？」

とママは笑っていった。

けれども、郷子は、その二枚の板チョコが欲しくて、二人でこっそり先生の家を訪ねてみようというヒロミの誘いに乗ったのではなかった。ヒロミは、先生の結婚相手が本当にハンサムかどうか、よくみてこようといっていたが、郷子はそんなことよりも、学校の外で極く普通に暮らしている先生をみるといふことに、なぜだかひどく好奇心をそそられたからであった。

③ 翌日も、予想通りに朝からよく晴れていたが、昼近くなつて風がすこし出てきた。これから遠出をするのだから、しっかりと腹捲えをしておかなければならなかったが、両親ばかりではなく姉たちの目も晦まして家を出なければならぬと思うと、さすがに気が重くて、食べるものが碌に喉を通らなかつた。

一時すこし前に、郷子は、川むこうの小公園へブランコ乗りをしにいくといつて家を出た。姉たちは中学と高校だから、そういえば間違つても仲間に入るなどいい出すおそれがないからである。ただ、外へ出てみると風が意外に冷たくて、日が傾くと寒くなりそうだったが、ブランコ乗りにオーバーを着ていくとい

うのはおかしい。郷子は、洗濯せんたくしたてのセーターにカーディガンを重ねて、遊び着のジーンズに運動靴うんどうくつを履はいていた。それで我慢がまんするより仕方がなかった。

⑧ 家を出てから、最初のコンクリート橋を渡るまでは、軀からだが揺れるほどの動悸どうきがして、ゆっくり歩こうとすればするほど足がもつれそうになったが、川むこうの路地へ入って駈かけ出すと、急に気が楽になった。小公園から迂回うかいして八幡はちまん様の森を目指していくと、ヒロミが先にきて鳥居の根元にしゃがんでいた。やはり膝ひざの擦すり切れそうなジーンズに赤いナイロンジャンパーを着ている。

二人は、どちらからともなく自分の家の方を振り返ると、急に犬にでも追われたように鳥居おくの奥の石段を駈かけ昇のぼった。

「あれ、持ってきた？」

「持ってきたわ。」

郷子は、カーディガンのポケットから、この夏、八重やえ檜がし先生から貰もらった暑中見舞しゅちゅうみまいの葉書と、百円玉を三つ取り出してみせた。ヒロミもジャンパーのポケットから三百円出してみせた。二人合せて六百円もあれば、途とち中ちゆうでおやつを食べた残りのこりで、花ぐらいは買える。二人は、人に気きのない境内けいだいを通り抜ぬけると、裏の鳥居から道へ出て、歩きはじめた。

(三浦哲郎「遠出」『木馬の騎手』より)

※(注) 軀からだ——体のこと。

問一 ——線 b 「カンネン」を漢字に直し、d 「人気」の読みをひらがなで答えなさい。

問二 ——線 a 「懐ふとしらを痛める」、c 「だしぬけに」の意味として最も適当なものを、それぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

a 「懐を痛める」

ア 気分を悪くする。

イ 費用を負担する。

ウ 衣服をよごす。

エ くやしく思う。

c 「だしぬけに」

ア うやうやしく

イ あつかましく

ウ 忘れたころに

エ いきなり

問三 —— 線①「それでもやはり、明日は晴れてくれればいいがと気になる晩には、こっそりてるてる坊主ぼうずを拵こしらえて窓の外に吊つるさないではいられない。」とありますが、この時の郷子の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 晴れてほしい日の前日には、たとえ晴れそうでも必ずてるてる坊主を作って、窓の外に吊しておきたいと思っている。

イ 誰かだれにてるてる坊主を作っているところを見つかり、秘密の計画がばれてしまうのではないかと不安に思っている。

ウ てるてる坊主なんて迷信めいしんめいた風習だと思いつつも、天気が心配な時は、晴れるためにできることは何でもやっておきたいと思っている。

エ 自分の家の物干しに、竿さおいっぱい並んでいる洗濯物せんたくものにまぎれこませて、てるてる坊主をうまく吊したいと思っている。

問四 —— 線②「ママの目がちよつとこわかった」とありますが、なぜ郷子は「ママの目がちよつとこわかった」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア お気に入りの紺こんのセーターが明日までに乾かわくかを聞きたいが、怪あやしまれるのではないかと思ったから。

イ ママに顔を見られると、自分が嘘うそをついているのがばれてしまうのではないかと思ったから。

ウ 言われる前に落ち葉集めのお手伝いをしないと、ママに怒おこられてしまうのではないかと思ったから。

エ 自分が隠かくし事ことをしていることを、ママはもうわかっているのではないかと思ったから。

問五 —— 線③「やはり秘密で膝ひざが重たくなっている。」とありますが、「秘密」の中身を具体的に説明している部分を、文中から二十五字以上三十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問六 —— 線④「みんなは、返事をするのも忘れて、きょとんと先生の赤く上気した顔を眺めていた。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「みんな」が「返事をするのも忘れて、きょとんと」したのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 先生の名前が変わってしまふことに驚いているから。

イ 先生の言っていることが理解できないでいるから。

ウ 先生が結婚することを納得できないでいるから。

エ 先生が何か話すまで待つていようと思つていいるから。

2 「赤く上気した顔」とありますが、この時の先生の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア しばらくの間、子どもたちと会えなくなることを悲しんでいる。

イ 子どもたちが話をまじめに聞いてくれないため、いらだつていいる。

ウ 一生結婚しないという約束をやぶつたことを申し訳なく思つていいる。

エ 結婚の報告をしたことに気恥ずかしさを感じ、照れていいる。

問七 —— 線⑤「先生は鳩のように目をまるくして」とは先生のどのような様子を表す表現ですか。答えとなる次の文の空らんにあてはまる感情を表すことばを考えて答えなさい。

() () て、目を大きく見開いた様子。

問八 —— 線⑥「そんなこと」とはどのようなことですか。文中の言葉をできるだけ使い、解答らんの「ということ」につながるように、十五字以上二十字以内で答えなさい。

問九 [2]の場面の中には、過去を回想している部分があります。[2]の文中から、その初めと終わりの三字をぬき出して答えなさい。

問十 —— 線⑦「これから遠出をする」とありますが、郷子はなぜ遠い先生の家を訪ねることにしたのですか。文中の言葉をできるだけ使い、解答らんの「から」につながるように、十五字以上二十字以内で答えなさい。

問十一 ――線⑧「家を出てから、最初のコンクリート橋を渡るまでは、軀が揺れるほどの動悸がして、ゆっくり歩こうとすればするほど足がもつれそうになった」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 家族に嘘をついて遠出をすることに後ろめたさを感じているから。
- イ 薄着で家を出てしまったため、寒さで体が思うように動かないから。
- ウ 誰にも秘密がばれないように、わざとゆっくり歩こうとしたから。
- エ 知らない場所に来てしまい、不安で胸がどきどきしてきたから。

問十二 次の①～④の文はこの文章の登場人物について説明したものです。内容が正しいものには○を、まちがっているものには×をつけなさい。

- ① ヒロミは、クラスのリーダー的存在で、ヒロミの考えには誰も逆らうことができない。
- ② 郷子のママは、ヒロミと郷子が仲良くしていることを、好ましく思っていない。
- ③ 八重樫先生は、子どもたちより前に、クラスの保護者に結婚の報告をしていた。
- ④ 郷子は、八重樫先生から結婚の報告を聞いても、すぐには本当だと思わなかった。

問十三 この作品の季節はいつだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 春
- イ 真夏
- ウ 秋
- エ 真冬

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

詩の定義は、詩人の数と同じだけあると言われています。言いかえれば、完全な定義はないということですが、それを承知で私は、あえて、私の定義を述べてみます。

詩とは、言葉で、新しくとらえられた、対象(意識と事物)の一面である。というのが私の定義です。この定義は、これからあとの話で、しだいに明らかになってゆくはずですから、ここでは、これ以上説明を加えません。

詩は、誰でも書くことができます。詩の方法を他人に教えられなくても、書くことができます。つまり、詩は誰の前にも平等に開かれています。

なぜでしょうか。

それは、言葉というものの性質から説明することができます。

① 言葉は、意識や事物を名指すことはできませんが、意識や事物の内容をまるごと伝えることのできない不完全な符号です。そして、不完全な符号であるということが、新しい表現を無限に可能にし、詩を可能にするのです。【ア】

このことを少し説明してみます。

海を一度も見なかったことのない人(海の写真も見なかった人)に、海を説明する場合を想像してみてください。沼を大きくしたようなもので、見渡す限りが水なのだと言明しても、聞いた人が、海を想像できるでしょうか。海を見たことのない人にとって、海という言葉は海を想像する手掛かりとして、ひどく不完全なものなのです。不完全な符号と言ったのは、そういう意味です。【イ】

② しかし、不完全な符号と言ったことの意味は、実はこれだけではありません。

言葉で、海を思い描くことのできなかつた人でも、海を見てしまえば、そのあとは、容易に海を思い描くことができます。けれどもその海の海岸線が砂浜か磯かによって、海の印象は異なることでしょう。あるいは海岸で見た海と、一週間も船で航行した海とは、その印象は、もつと異なるでしょう。さらに、飛行機から見下ろした海なら、別の印象があるでしょう。

A、同じ海という言葉でも、思い浮かべる海は、人それぞれに、また、同じ人でも時によって、ちがうと考えられます。これが、不完全な符号ということの二つめの意味です。【ウ】

③ それでは、言葉は不完全なだけかと言いますと、そうではありません。言葉は、その言葉で名指したものを、個々の形状とは切り離し、集約した像として喚起することを可能にします。海の例で言えば、いろいろな所で見た特定の海の姿とは別に、それらに共通な、海の映像を呼び起こす(それは人によってちがいますが)はたつきです。このはたつきがあるので、私たちは、言葉で、ある事物を話題にすることができます。猫という言葉はこの猫ということとは無関係に、猫一般を指すことができます。実際には、たとえば自分の家で飼っている三毛猫を思い浮かべられるかもしれませんが、それとは別に、猫と名付けられている動物の像を呼び起こすことができるわけです。【エ】

このように、言葉は、名指しはするが事物の内容をまるごと示すことのできないという短所と、その短所をちようど裏返したような長所、つまり具体的内容は曖昧だが同種の事物を一括して代表できるといふ利点とをあわせ持っていることがわかったわけです。【オ】

さて、言葉が、このような性質のものであるからこそ、詩が可能になるということに話を移しましょう。

言葉が意識や事物を名指しているとは私は述べました、しかし言うまでもないことですが、言葉は、名指した意識及び事物とは別のものです。たとえば、松という言葉は、松そのものではありません。人間がただ一方的に、松という言葉で松という植物を名指し、言葉で松の全体あるいはその性質形状などを漠然と代表させているというだけのことなのです。ところが、言葉の最も日常的な使い方は、松という言葉で松の性質や形状などをすべて含んで代表しているつもりという使い方なのです。

松という言葉が松そのものではない、ということぐらいは、誰でも知っていますが、松という言葉を使いなれてゆくうちに、松についてすべてを知っているつもりになるという傾きが生じやすいのです。言葉の日常的な使われ方は、すべて知っているつもり、の使われ方といってもいいでしょう。

もちろん、それは無意識のうちにならなっているのですが、そのために、対象に深い注意を払わないという結果になりやすいのです。つまり、言葉の日常的な使われ方では、言葉がある対象に人を引き合わせてくれると同時に、その対象に深入りすることを妨害するという姿をとるのです。これを、一つの比喩で語りますと、誰かを、ある秘密の部屋に通ずる入口のドアまで連れて行って、そのドアに鍵をかけてしまう人のようなものです。ところが、部屋の前まで連れて行ってもらっただけなのに、その部屋の内部がすべてわかったと錯覚してしまうのも、私たちの言葉への対応の仕方なのです。

言葉で名指したものはすべてわかっているつもりという、この日常的な言葉意識は、言葉によって行う物の見方や表現法にも類型化を招き入れるようになります。たとえば、よく晴れた空のことを **B** です、と表現して、それで満足できる物の見方です。

こうした類型化した物の見方を嫌うというところを出発点にして、日常的な言葉の使い方から離れるという段階が、つぎに考えられます。簡単に言えば、自分の目で物を見直そうということで、わかっているつもりのこととか、類型的な物の見方とは質のちがう平面に出てゆこうということです。それを、ここでは仮に文学的表現と呼ぶことにします。

⑦ そういう表現を、不完全な言葉で行おうとするわけですから、このこと自体かなり厄介なことですが、文学的表現の領域にも、すでに多くの類型ができあがっていて、それに慣らされてしまうということがあるのです。

松の例を引きまますと、松は、風のからむ松の音の側からとらえられるという傾きがあります。松籟、松韻、松濤は、いずれも松風のことで、松柏という言葉もあって、長寿と繁栄のシンボルの意味に使われていますが、松のとらえ方にしても、かなり狭いものです。

松に関連して思い出されるのが、芭蕉（一六四四—一九四）の俳句——※ 辛崎の松は花より臙にて——です。「臙」という言葉は、和歌の伝統的用法としては春の臙月か、まれに花について言う形容詞だったようですが、芭蕉は、あえてそれを煙雨の中の松の形容に使ったのです。松と臙は、それまでの歌人俳人の発想になかったらしいのです。いわば、松に臙という言葉は使うべきでないという類型発想を、芭蕉が破ったといえることができます。このように松が描かれてみると、たしかに、松の遠景のやわらかなけむりが見えてきます。

⑧ 言葉が詩になるというのは、こういう例のような場合を言います。私が述べた詩の定義、言葉で、新しくとらえられた、意識と事物の一面に、これはあてはまるでしょう。

なぜ、詩が書けるか、というこの章の結論を出しましょう。

言葉は、ある対象を名指すことはできるが対象の内容をまるごと示すものではない。それだからこそ、事物の内容について無限の見方が可能になる。たとえ、ある事物について、これまで多くの人がいろいろな見

方をしてきたにしてもそれはすべてを言い尽くしているわけではなく、いわば一面です。未開拓の領域は後世の人に残されているのです。

私たちが対象を歌ったり描いたりするのは、その対象への関心があるからですが、その関心が働く限り、新しい見方は無限に可能になり、詩が生まれる可能性もあるというわけです。

(吉野 弘 『詩の楽しみ』より)

※(注) 意識と事物——心の働きと物そのもの。

符号——記号。

喚起——よび起こすこと。

曖昧——はっきりしないこと。

一括——ひとまとめにすること。

漠然と——はっきりしない様子。

類型化——にかよった形や形式にすること。

芭蕉——江戸時代の俳人。

辛崎の松は花より朧にて——辛崎は地名。現在の滋賀県大津市にある辛崎の松と桜がおぼろにかすむ情景を

よんでいる。

煙雨——けむるようにふる雨。

問一——線①「言葉は、意識や事物を名指すことはできませんが、意識や事物の内容をまるごと伝えることのできない不完全な符号です。」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものの一つを選び、その記号を答えなさい。

ア 言葉は、心の働きや物の名前を指し示すことは可能だが、それらの中身をすべて伝えきることはできないという点で完全ではないこと。

イ 言葉は、人の意識や事物を他者に伝えることは可能だが、無意識のレベルの内容まで伝えるのは難しく完全にはできないこと。

ウ 言葉は、その言葉を知っている人だけでなく、知らない人にも意味を伝えることを可能にする反面、未知の部分も残していること。

エ 言葉は、人の遠い記憶を呼び覚ます場合もあるが、たいていは記憶を意識化するところまではいかないという点で完全ではないこと。

問二——線②「不完全な符号と言ったことの意味は、実はこれだけではありません。」とありますが、「これ」の他に筆者が言葉を「不完全な符号」だと考える理由を、海の例を参考にして考え、解答らんの「から」につながるように三十五字以内で答えなさい。

問三 文中の A にあてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア しかし イ つまり ウ ところが エ さて

問四 —— 線③「言葉は、その言葉で名指したものを、個々の形状とは切り離し、集約した像として喚起することを可能にします。」とありますが、「集約した像として喚起する」を文中ではどのように言いかえていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア ある事物を話題にする
イ 同種の事物を一括して代表できる
ウ 意識や事物を名指している
エ 事物の内容をまるごと示す

問五 —— 線④「言うまでもない」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 話すすべがない。
イ 答えようがない。
ウ 言う必要がない。
エ 語りようがない。

問六 —— 線⑤「それは無意識のうちにそうなっている」とは、どういうことですか。解答らん「」になっているということ」につながるように文中からぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問七 —— 線⑥「この日常的な言葉意識は、言葉によって行う物の見方や表現法にも類型化を招き入れるようになります。」とありますが、筆者は、私たちの「日常的な言葉意識」によって「物の見方や表現法」に「類型化を招き入れ」ないようにするためには、どうする必要が有ると考えていますか。文中から十文字程度でぬき出し、解答らんの「必要がある」につながるように直して答えなさい。

問八 文中の B にあてはまる比喩を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 透けるような青空
イ 抜けるような青空
ウ 絵のような青空
エ 夢のような青空

問九 —— 線⑦「そういう表現」とは何をさしていますか。文中から五字でぬき出して答えなさい。

問十 ――線⑧「言葉が詩になるといのは、こういう例のような場合を言います。」とありますが、芭蕉ばしやうの俳句のどのような言葉の使い方が「詩」になっているのですか。それを説明した次の文の□ A・Bにあてはまる言葉を、文中からそれぞれぬき出して答えなさい。

・芭蕉の「辛崎からさきの松は花より朧おぼろにて」という俳句は、それまでの和歌の伝統的用法や□ Aを破り、「□ Bに朧」を取り合わせることで、言葉に新たな価値を見出し、詩として成立している。

問十一 ――線⑨「未開拓みかいたくの領域は後世の人に残されているのです。」とは、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 後代の人々にも、事物に対する無限の見方や表現の余地が残されていること。
- イ 後代の人々は、積極的に伝統的な表現手法を取り入れなければならないこと。
- ウ 後代の人々にも、まだ知らない国の文学や文化を知る機会が残されていること。
- エ 後代の人々は、詩の言葉を学び無限の命に触れる努力をするべきであること。

問十二 次の一文は、文中の【ア】～【オ】のどこに入れるのが適当ですか。その記号を答えなさい。
これが言葉の長所なのです。

問十三 本文の内容と一致するものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 詩とは、言葉で対象を表現する方法をさすが、意識や事物の内容をまるごと伝えることができるという便利な側面を持っている。
- イ 言葉には、日常的な使い方と非日常的な使い方の二通りがあるが、後者の使い方慣れると類型的な表現しかできなくなる。
- ウ 詩は、誰だれでも書くことができるが、ふだんから海を見たり山をながめたりして感性を養うことが大切であり、訓練が必要だといえる。
- エ 言葉は、不完全であるがゆえに新しい見方を可能にするため、対象に対する関心を持ち続ける限り新しい表現が無限にできる。

三 漢字や言葉のきまりに関する次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 近くの国と同メイを結ぶ。
- ② タン生日を祝う。
- ③ かきの実がジユクス。
- ④ ボウ動をしずめる。
- ⑤ ボウグラフをよみとる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 誤って花びんを割る。
- ② 尊い命を大切にす。
- ③ 勇ましいかけ声をあげる。
- ④ 険しい山道。

問三 次の①～③の各文の——線部に注意して□にひらがなを入れ、文を完成させなさい。ただし、一つの□には一文字が入ります。

(例) たぶん、明日は晴れる□。(答) だろう

- ① ぜひ、明日の集まりにご参加□。
- ② まるで、空を飛んでいる□。
- ③ 彼は、決して嘘をつか□。

問四 次の①・②の各文の空らんにあてはまる言葉として最も適当なものをそれぞれのア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 私は、美しい蝶が花の蜜を吸うところを()見つめていた。

- ア 息をきらして イ 息をこらして ウ 息を合わせて エ 息をはずませて

② 私は、友人のやさしいところづかいに()思いでいっぱいだった。

- ア 頭をひねる イ 頭が上がらない ウ 頭がいたい エ 頭が下がる

問五 次の①・②の各文が正しいことわざになるように、空らんにあてはまる最も適当なものをそれぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 情けは () ()

- ア 人のためにあり
- イ 人の心から
- ウ 人のためならず
- エ 人を幸せに

② 目は口ほどに () ()

- ア もの言わず
- イ ものを言う
- ウ ものを知る
- エ もの知らず

問六 「とびが□を生む」とは、「平凡な親からすぐれた子どもが生まれる」という意味のことわざです。□にあてはまる鳥の名前をひらがなで答えなさい。